

東京近郊に於けるカレーライスの普及過程

篠原義明（経済学部 3年）

指導教員：光田達矢

ユネスコ無形文化遺産保護条約第8回政府間委員会、ユネスコ無形文化遺産に日本の食文化が登録されたように、近年世界各国で日本食文化の認知度が上昇しつつある。そうした中日本で一般に食べられているカレーライスは日本で発達したものであり、国民食と呼ばれながらも、日本食と言い切ることがためらわれてきた料理の一つである。本論文では、この様に明らかに外来のものと受け取られているカレーライスが、明治初頭から昭和初頭にかけての東京近郊においてどの様に広まっていったかを明らかにするものである。

本論文では、先ず日本食の中におけるカレーライスの位置づけを概観する。しかしカレーライスと言っても様々なものがあり、またカレーライスを国民食として分析の対象として取り上げることは適切かどうかという問題が存在する。そこで続けて本論で取り扱うカレーライスの定義、カレーライスを国民食と呼んで良いのかということについて触れる。その後先行研究と用いる資料、分析の対象とする時代に言及する。

次に明治・大正・昭和初期を細かな期間に分け、それぞれの期間内にカレーライスがどの様に広まっていったかを、当時の洋食がどのような位置づけにあったのかと合わせて分析する。先行研究では日本におけるカレーライスの時系列的な普及を主眼においているが、そこに地域的な観点は少ない。そこで本分析では、カレーライスが東京近郊のどの地域のどの様な人々に受容されていったかを中心に見る。この分析から東京近郊においてカレーライスは階層と空間という二つの面から浸透していったことが言える。

そして最後に以上を通じてカレーライスは東京都市部の富裕層から庶民層へ広まり、その後口伝えに農村部の庶民に広まって行ったことを結論づけた。